

論文

心理学的安寧感におよぼす基本的性格特性の影響に関する検討

— 女子大学生の場合 —

¹諸井 克英 ²馬場 菜々花¹同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授²同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2021年度卒業生**The Exploration of the Influence of the Basic Personality Traits on Psychological Well-Being in Female Undergraduates.**¹MOROI Katsuhide ²BABA Nanaka¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2021

Keywords: psychological well-being, basic personality traits, big five, structure, covariance structure analysis.

I. 問題

Diener (1984)によれば, “*Psychological Abstracts International*”誌の検索項目として“happiness”が1973年に採用され, 1974年に発刊された“*Social Indicators Research*”誌には“subjective well-being”に関する研究が多く掲載されるようになった。

諸井・丸山(2011)は, 女子大学生に「小学4年生」から「65歳」までの7時点における幸福感評定を求めた(ただし, 「小学4年生」, 「中学2年生」, および「高校2年生」は過去の幸福感, 「ここ半年間」は現在の幸福感, 「25歳」, 「45歳」, および「65歳」は未来の幸福感)。7時点の幸福感評定いずれも尺度中性点を有意に上回っていた。重回帰分析によると, 過去の3つの幸福感は時間的展望に関する過去の拒絶の側面, 未来の3つの幸福感は時間的展望に関する希望の側面によって, それぞれ有意な影響を被っていた。これらの傾向は, 時間的展望と幸福感に関するRobinson & Ryff (1999)の考えと一致していた。

ところで, 諸井・丸山(2011)は, わが国における幸福感研究を概観し, 評価上の異なる時間的碇泊点の混在を指

摘した。a) 現時点の幸福感(島井・大竹・宇津木・池見(2004)による日本版主観的幸福感尺度), b) 現時点と未来の幸福感の混在(植田・吉森・有倉(1992)によるハッピーネス尺度), さらにc) 過去との比較や未来の状態に関する予測の混在(伊藤・相良・池田・川浦(2003)による主観的幸福感尺度)。つまり, 当該人物の幸福感を過去から未来までの想定できる時間範囲におけるいつの時点の幸福感と見なすのかということは重要であろう。

以上の評定基準の問題とは別に, 幸福感の次元性に関する仮定の問題を挙げることができる。つまり, 幸福感という概念を単次元として捉えるか, 多次元として想定するのかということである。例えば島井ら(2004)や伊藤ら(2003)による尺度は単次元の仮定に基づいている。そもそも幸福感研究の発展の契機ともなったDiener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985)による生活満足感尺度(諸井, 2001, 参照)もそうである。

西田(2000)は, Ryff (Ryff, 1989; Ryff & Keys, 1995)に基づき心理的well-being尺度を作成した。Ryff (1989)は, 心理的well-beingを人生全般にわたる肯定的な心理的機能として捉え, 以下の6側面から成るという多次元的

仮定に基づき、これを測定する尺度の作成を試みた。a) 人格的成長 (personal growth) (発達と可能性の連続上において、新しい経験に向けて開かれている感覚)、b) 人生における目的 (purpose in life) (人生における目的と方向性の感覚)、c) 自律性 (autonomy) (自己決定し、独立、内的に行動を調整できるという感覚)、d) 環境制御力 (environmental mastery) (複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚)、e) 自己受容 (self-acceptance) (自己に対する積極的感覚)、f) 積極的な他者関係 (positive relationship with others) (暖かく、信頼できる他者関係を築いているという感覚)。

西田 (2000) は、Ryff (1989) が作成した尺度を精査・修正し、新たな76項目尺度を作成した。郵送調査によってこの尺度を成人女性 (平均45.1歳、25-63歳) に実施した。因子分析 (主因子法、直交回転) を実施し、Ryff (1989) の6側面に対応した6因子を抽出した。

ところで、単一次元に基づく測定は (例えば、諸井・丸山 (2011))、他の心理学的概念との関連づけにおいて回答者の評定負担を軽減する点で有用である。しかしながら、幸福感が多側面から構成されているとすれば、単一次元仮定による研究知見は限界をもつことになる。そこで本研究では、Ryff (1989) や西田 (2000) と同様に多次元性を仮定することとする。

Costa & McCrae (1980) は、Eysenck (Eysenck & Eysenck, 1975) が提唱する基本的性格次元である外向性と神経症傾向が10年後の幸福感を予測できることを確認した。なお、性格とは、「広辞苑」(新村, 2018) によると「各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意志・認知の面での傾向や性質」を表している。ここで、心理学の一般的図式 (例えば、Lewin (1951) は人の行動が人と環境の関数と定式化した; $Behavior = F(Person, Environment)$) に従えば、幸福感も状況的要因と内的要因の影響をともに被ることになる。Costa & McCrae (1980) による知見は、状況的要因に関わらず性格という内的要因が幸福感に影響を与えることを示している。

そこで、本研究の主目的として、個人的成長の過程で培われた基本的性格特性が幸福感にどのような影響をおよぼすかを検討する。なお、本研究では、近年、多くの研究で注目されている Big Five の考えを取りあげた (和田, 1996)。この考えによれば、基本的性格特性は、外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、および調和性という5次元から構成される。この5次元が堅固であることは、著者らによる先行研究でも確認された (和田 (1996) に従った60

項目版: 諸井・早川・板垣, 2014; 諸井・坂元, 2014; 前2研究の結果に基づき作成された30項目版: 諸井・板垣 (2018), 諸井・坂下 (2019), 諸井・岡田 (2021))。

本研究では、Schmutte & Ryff (1997) の研究枠組みに倣って、基本的性格特性である Big Five が Ryff (1989) が提起した心理的 well-being の6側面におよぼす影響を探索する。Schmutte & Ryff (1997) は、a) 行動や思考の安定したパターンに向かう個人的属性である性格 (Big Five) と、b) 発達上の達成や生活上の出来事に応じて変化すると期待される well-being との関連を検討した。そのために、電話番号を用いた無作為抽出によって選別された男女 (44-63歳) を対象に調査が行われた。日常生活感情 (肯定的、否定的) を統制した重回帰分析 (説明変数: Big Five 5変数; 従属変数: well-being 6変数) が実施された。well-being それぞれは様々な仕方で Big Five の影響を被っていた。とりわけ強い影響が次の通り見出された。a) 神経症傾向 (負) → 自己受容、b) 誠実性 → 環境制御力・人生における目的、c) 開放性 → 人格的成長、d) 調和性 → 積極的な他者関係、e) 神経症傾向 (負)・外向性 (正) → 自律性。

なお、諸井・木ノ下 (2020) は、別の研究目的のために西田 (2000) による尺度を女子大学生に実施した。しかし、自己受容、人生における目的、人格的成長、および自律性の4側面から成る因子解を得た。本研究の副次的目的として、もともと仮定されている6次元性 (Ryff, 1989; Ryff & Keys, 1995; 西田, 2000) の検討を再度試みる。

以上の目的のために、女子大学生を対象とした調査を実施した。

II. 方法

1. 質問紙の実施と対象

京都府内に位置する女子大学での社会心理学関係の受講生を対象に、「マナビー」(様々な機能のうちのアンケート機能) を利用して調査を実施した (2021年4月28日~2021年5月26日)。システムの性質上匿名性には欠けるが、実施にあたって a) 結果を全体として処理し個人ごとに回答を問題にしないことや b) 成績と無関連であることを強調した。

青年期の範囲を逸脱している者 (25歳以上) を除き、以下に述べる設問に完全回答した228名を分析対象とした (2年生128名、3年生64名、4年生36名)。平均年齢は19.77歳 ($SD = .88$, 19~23歳) であった。

2. 質問紙の構成

質問紙は、「マナビー」を利用して呈示された。回答者の基本的属性に加え、a) Big Five 尺度、b) 心理学的安寧感尺度から構成されている（なお、西田（2000）は Ryff, (1989) による“psychological well-being”という用語を心理的 well-being としている。“well-being”とは「幸福、福利、安寧」であることを踏まえ（竹林（編），2002），本研究では、諸井・木ノ下（2020）と同様に、心理学的安寧感とした）。

(1) Big Five 尺度

回答者自身の基本的な性格特性を Big Five の考え（和田，1996）に基づき測定した。和田（1996）は、性格特性論の考えに基づき、60項目から構成される尺度を作成した（外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、および調和性の5次元測定、各12項目）。ここでは、先行研究（諸井・板垣，2018；諸井・坂下，2019；諸井・岡田，2021）と同様に、30項目尺度（各因子6項目）を用いた（表1-a 参照）。

回答者にこの6ヵ月間の自分自身の生活を振り返らせた上で、30項目それぞれが自分自身にあてはまる程度を4件法で回答させた（「4. かなりあてはまる」、「3. どちらかといえばあてはまる」、「2. どちらかといえばあてはまらない」、「1. ほとんどあてはまらない」）。

(2) 心理学的安寧感尺度

日常的に回答者が抱えている心理学的安寧感（なお、本研究で用いる尺度の名称を心理学的安寧感尺度とした）を測定するために、西田（2000）が Ryff (Ryff, 1989; Ryff & Keys, 1995) に基づき作成した心理的 well-being 尺度を用いた。先述したように、この尺度によれば、a) 人格的成長、b) 人生における目的、c) 自律性、d) 環境制御力、e) 自己受容、f) 積極的な他者関係、という6次元から構成される。本研究では、諸井・木ノ下（2020）と同様に、西田（2000）が最終的に抽出した6因子それぞれで負荷が高かった43項目を用いた（表1-b、付表2）。

この6ヵ月間の自分自身の生活を振り返らせた上で、各項目に表されている態度や行動が回答者自身にどのくらいあてはまるかを4件法で答えさせた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。

III. 結果

1. 尺度の検討

(1) 分析の手続き

2尺度それぞれで項目水準での事前検討を行い、平均値

の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に因子分析（最尤法、プロマックス回転 ($k=3$)）を行い、初期解での初期共通性をチェックした ($> .20$)。

残りの項目を分析対象として、初期固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、2つの基準を設けた (a) 特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 $\geq .40$)、b) 他因子への負荷が小さい (絶対値 $< .40$)。各項目が単一の因子にのみ絶対値 $.40$ 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら、a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られた解を採用した。

次に、因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準 (絶対値 $\geq .40$) に項目を選別し、因子概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をした上で、下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行い (項目-全体相関分析、 α 係数)、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

(2) 因子分析の実施

a) Big Five 尺度

項目水準の検討では30項目すべてが適切であり、因子分析での初期共通性も良好であった ($\geq .32$)。仮定に従って5因子解を求めると、明確な因子パターンが得られた (表1-a)。各因子で因子概念に一致するように得点の調整を行い、下位尺度ごとに1次元性の確認を行ったところ、十分な結果であったので (表1-a)、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

b) 心理学的安寧感尺度

項目水準の検討によると、3項目が不適切であった (平均値: $m > 3.5$, well_a_1; $m \neq 3.5$, well_a_6; $m < 1.5$; well_b_4/ 標準偏差値: $SD < .60$ well_a_1, well_b_4)。残りの40項目での初期共通性も適切であったので ($\geq .31$)、これらの項目で因子分析を行った。2-10因子解が可能であったが、最も明確な因子パターンが抽出された5因子解を採用した (表1-b)。これは、4因子解を得た諸井・木ノ下 (2020) の結果と異なる。

Ryff (1989) や西田 (2000) の環境制御力を除く5側面が抽出された。下位尺度に関する1次元性の検討結果も適切であったので (表1-b)、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

表1-a Big Five 尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（k=3））の結果一回転後の因子負荷量一

当該因子負荷量		当該因子負荷量						
〔Ⅰ. 神経症傾向〕 [α=.88, r=.62~.78]		〔Ⅳ. 開放性〕 [α=.78, r=.46~.63]						
self_bf_a_2	悩みがち	神	.87	self_bf_c_1	想像力に富んだ	開	.72	
self_bf_a_6	不安になりやすい	神	.85	self_bf_a_3	独創的な	開	.71	
self_bf_c_2	傷つきやすい	神	.72	self_bf_c_3	美的感覚の鋭い	開	.61	
self_bf_b_1	心配性である	神	.70	self_bf_a_7	多才な	開	.54	
self_bf_b_10	弱気になる	神	.68	self_bf_c_7	興味の広い	開	.51	
self_bf_b_6	気苦労の多い	神	.66	self_bf_b_2	進歩的な	開	.47	
〔Ⅱ. 外向性〕 [α=.87, r=.57~.72]		〔Ⅳ. 誠実性〕 [α=.78, r=.40~.61]						
self_bf_a_10	無口な	外	.79	self_bf_b_3	怠惰な	誠	.69	
self_bf_c_5	社交的な	外	-.74	self_bf_a_8	ルーズな	誠	.68	
self_bf_a_1	話し好きな	外	-.73	self_bf_c_4	計画性のある	誠	-.65	
self_bf_b_9	暗い	外	.71	self_bf_a_4	いい加減な	誠	.64	
self_bf_b_5	外向的な	外	-.66	self_bf_b_7	成り行きまかせな	誠	.55	
self_bf_c_9	地味な	外	.63	self_bf_c_8	几帳面な	誠	-.49	
〔Ⅲ. 調和性〕 [α=.83, r=.50~.76]								
self_bf_b_4	怒りっぽい	調	.87					
self_bf_a_9	短気な	調	.79					
self_bf_c_6	とげがある	調	.67					
self_bf_a_5	温和な	調	-.58					
self_bf_c_10	反抗的な	調	.53					
self_bf_b_8	寛大な	調	-.52					
				〔因子相関〕				
				I	.38	.30	-.20	-.08
				II	***	.21	-.36	.14
				III		***	-.10	.15
				IV			***	.01

N=228

初期因子固有値 >1.95; 初期説明率57.80%

適合度検定: $\chi^2_{(295)}=403.15, p=.001$

[] 内: α: Cronbach の信頼性係数値 / r: 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値

和田 (1996): 外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, 調和性

網掛け: 逆転項目

表1-b 心理的安寧感尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（k=3））の結果一回転後の因子負荷量一

当該因子負荷量		当該因子負荷量							
〔Ⅰ. 自己受容〕 [α=.83, r=.48~.70]		〔Ⅳ. 積極的な他者関係〕 [α=.75, r=.47~.63]							
well_e_4	私は、自分自身に対して肯定的だ。	受	.81	well_b_3	私にとって、まわりの人たちとの親密な関係を維持することは面倒だ。	積	.71		
well_a_4	私は、自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる。	受	.70	well_c_6	私は、誰かといると愛情や親密さを感じることが多い。	積	-.65		
well_c_4	私は、良い面も悪い面も含め、自分自身のありのままの姿を受け入れることができる。	受	.70	well_b_9	私は、これまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった。	積	.58		
well_b_1	私は、自分自身を好きである。	受	.66	well_d_9	私自身の時間をまわりの人たちと共有できると、うれしくなる。	積	-.50		
well_b_7	私は、自分の性格についてよく悩むことがある。	受	-.54	〔Ⅴ. 人格的成長〕 [α=.77, r=.56~.64]					
well_d_1	私は、今は異なる自分になりたいと思う。	受	-.51	well_d_4	私にとって、新しい経験を積み重ねることが楽しみだ。	成	.67		
〔Ⅱ. 自律性〕 [α=.84, r=.42~.81]		well_a_7					私にとって、新しいことに挑戦して新たな自分を発見することは楽しい。	成	.64
well_c_3	私の考え方は、その時の状況や他の人の意見に左右されがちになる。	律	.90	well_c_7	私にとって、自分らしさや個性を伸ばすために新たなことに挑戦することは重要だ。	成	.63		
well_b_6	私は、自分の生き方を考えるときに、人の意見に左右されてしまう。	律	.86						
well_a_9	私は、重要なことを決めるときに、他の人の判断に頼ってしまう。	律	.67						
well_d_6	私は、自分の行動は自分自身で決める。	律	-.53						
well_a_3	私は、何かを決めるとき、世間からどう見られているかとても気になる。	律	.53						
〔Ⅲ. 人生における目的〕 [α=.85, r=.58~.75]									
well_b_5	私のやりたいことが本当に何なのか、見出せない。	目	.84						
well_e_6	私は、自分の将来に夢をもっている。	目	-.75						
well_a_8	私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道も見出せない。	目	.69						
well_a_2	私は、現在、目的なしにさまよっているような気がする。	目	.65						
well_c_2	私がどんな人生を送りたいのかは、明確だ。	目	-.55						
				〔因子相関〕					
				I	-.34	-.41	-.36	.29	
				II	***	.48	.10	-.30	
				III		***	.31	-.34	
				IV			***	-.26	

N=228

初期因子固有値 >1.32; 初期説明率62.73%

適合度検定: $\chi^2_{(100)}=234.06, p=.001$

[] 内: α: Cronbach の信頼性係数値 / r: 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値

諸井・木ノ下 (2020): 自己受容, 人生における目的, 人格的成長, 自律性

網掛け: 逆転項目

2. 基本的性格特性と心理学的安寧感との関係

(1) 重回帰分析

まず、Big Five 下位尺度5得点と心理学的安寧感下位尺度5得点との間のピアソン相関値を算出した (付表1)。

次に、心理学的安寧感下位尺度5得点をそれぞれ説明変数とし、Big Five 下位尺度5得点を従属変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法: 投入基準 $p < .05$, 除去基準 $p > .10$) を行った (表2)。

基本的性格特性は、心理学的安寧感5側面すべてに有意な影響をおよぼしていた。ただし、影響の仕方は異なっていた。例えば、外向性は心理学的安寧感5側面すべてを有意に促進していたが、神経症傾向は、自己受容と自律性の低下につながっていた。

(2) 共分散構造分析

心理学的安寧感の規定因に関する因果分析を Amos28.0.0 を用いて行った。前述した重回帰分析で認められた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式 (最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た (図1)。有意な影響経路は、先の重回帰分析で認められた傾向と同じであった。また、係数の大きさを見ると、「神経症傾向→自己受容」、「外向性→人生における目的」、「外向性→積極的な他者関係」、「開放性→人格的成長」で比較的顕著な影響が認められた。

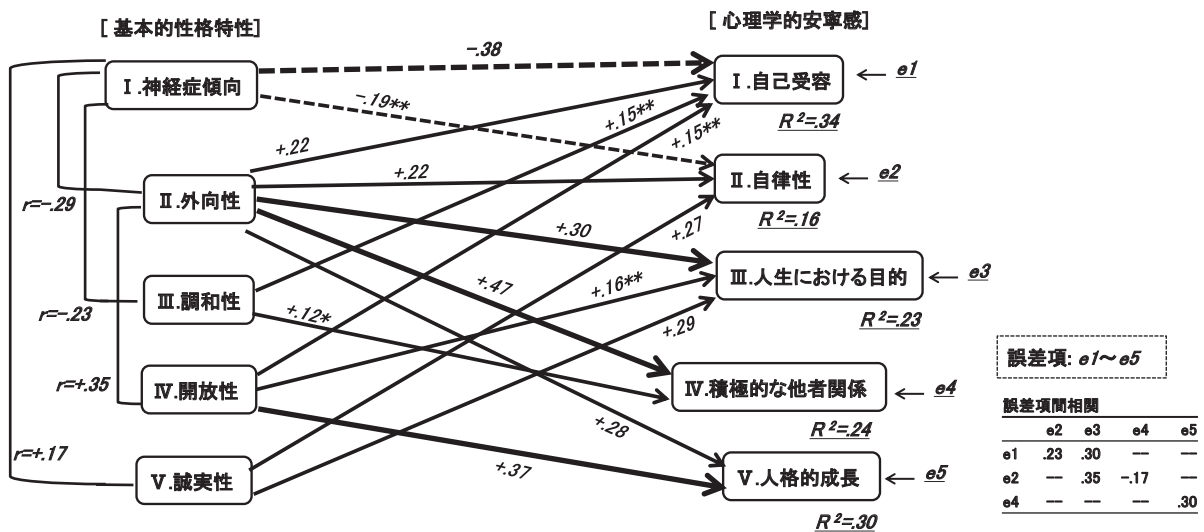
表2 心理学的安寧感におよぼす Big Five の影響
— 重回帰分析 (ステップワイズ法) —

独立変数: I. 神経症傾向 II. 外向性 III. 調和性 IV. 開放性 V. 誠実性		
従属変数: I. 自己受容		
I. 神経症傾向	$\beta = -.38$	$p = .001$
II. 外向性	$\beta = .21$	$p = .001$
IV. 開放性	$\beta = .16$	$p = .005$
III. 調和性	$\beta = .14$	$p = .012$
	$R^2 = .38$	$p = .001$
従属変数: II. 自律性		
II. 外向性	$\beta = .22$	$p = .001$
V. 誠実性	$\beta = .27$	$p = .001$
I. 神経症傾向	$\beta = -.20$	$p = .003$
	$R^2 = .19$	$p = .001$
従属変数: III. 人生における目的		
II. 外向性	$\beta = .29$	$p = .001$
V. 誠実性	$\beta = .29$	$p = .001$
IV. 開放性	$\beta = .19$	$p = .003$
	$R^2 = .26$	$p = .001$
従属変数: IV. 積極的な他者関係		
II. 外向性	$\beta = .47$	$p = .001$
III. 調和性	$\beta = .15$	$p = .012$
	$R^2 = .27$	$p = .001$
従属変数: V. 人格的成長		
IV. 開放性	$\beta = .37$	$p = .001$
II. 外向性	$\beta = .29$	$p = .001$
	$R^2 = .30$	$p = .001$

N=228

β : 標準偏回帰係数 / R^2 : 決定係数

ステップワイズ法 (投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$)



矢印: 標準化パス係数 [**および*以外すべて $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$]

適合度: $\chi^2_{(22)} = 42.14, p = .006; GFI = .96; AGFI = .91; RMSEA = .06$

図1 基本的性格特性と心理的安寧感との関係 (N=228)
— 観測変数の構造方程式による分析 (Amos28.0.0, 最尤推定法) —

IV. 考察

本研究の目的は、a) 心理学的安寧感の基本的構造の探索と b) 心理学的安寧感を支える基本的性格特性の解明であった。このために、「マナビー」を利用して、女子大学生を対象とした質問紙を実施した。

本研究では、基本的性格特性の測定のために Big Five 尺度を用いたが、先行研究（諸井・岡田, 2021など）と同様の5因子構造が得られた。つまり、本研究でも Big Five の頑健さ（外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, および調和性）が示されたといえる。

次に心理学的安寧感の構造に関する結果を述べる。Ryff (1989) や西田 (2000) の研究に従えば、a) 人格的成長, b) 人生における目的, c) 自律性, d) 環境制御力, e) 自己受容, f) 積極的な他者関係の6側面が現れるはずである。しかし、本研究の因子分析によれば、d) の側面を除く5因子解が得られた。本研究で対象とした女子大学生の場合、大学という枠組みの中で基本的に生活しているので、成人女性と異なり、生活状況が比較的斉一的でそれほど複雑とは考えられない。従って、環境の統制があまり求められないと推測され、環境制御力の側面が現れない可能性がある。

心理学的安寧感尺度を女子大学生に実施した前研究（諸井・木ノ下, 2020）では、Ryff (1989) や西田 (2000) の環境制御力や積極的な他者関係を除く自己受容、人生における目的、人格的成長、自律性の側面から構成される4因子解を得た。諸井・木ノ下 (2020) は、対象の年齢範囲が原因と解釈した。つまり、西田 (2000) が対象とした成人女性に比べて、女子大学生に限定したために環境制御力と積極的な他者関係の側面が曖昧になったのである。しかし、積極的な他者関係については、本研究の対象は、年齢的には諸井・木ノ下 (2020) の対象と類似しており、対象の年齢範囲だけでは説明できない。

なお、西田 (2000) の尺度は、様々な対象にも実施されている（管弦楽団活動を経験した大学卒業生：浜崎・田村・木内・梶井・長島・山田・寺菌, 2010; 看護学実習を経験した看護大学生：坂本・福森子・木村, 2018; 大学生：三原・岡村・矢島・津田, 2019など）。しかし、残念ながら尺度の次元性の検討は行われていない。引き続き、心理学的安寧感尺度の次元性について世代要因を含めて検討する必要がある。

ところで、大石・小宮 (2012) によれば、幸福感に関する心理学的測定尺度は以下の問題点を抱えている。a) 幸せという言葉の意味に関する文化差（幸せを生じる出来事

の差異など）、b) 評定項目に対する反応の仕方（極端な方向を示す選択肢の利用の有無など）、c) 幸せという回答への社会的望ましさの影響（抑制された感情表現の有無など）、d) 記憶バイアス（肯定的な記憶への注意の有無）。例えば、唐澤・菅 (2010) は、北山 (1994) によって提唱された文化的自己観（「ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提」）の考えに基づき、幸福感も構成すべきであると主張している。つまり、相互協動的自己観が優勢である日本人と相互独立的自己観が支配的である米国人では幸福感の抱き方が異なり、それに対応した心理学的測定が行うべきであるとされた。このような考え方に従うと、本研究で依拠した Ryff (1989) の概念化に文化的自己観の視点を交差させる必要があるといえる。

本研究では、基本的性格特性が心理学的安寧感におよぼす影響の解明のために、観測変数の構造方程式（最尤推定法；豊田, 1998）による分析を試みた。最終モデルを見ると、5つの基本的性格特性すべてが心理学的安寧感に有意な影響をおよぼしていた。心理学的安寧感5側面それぞれが、成人男女を対象とした Schmutte & Ryff (1997) と同様に、様々な仕方で基本的性格特性に支えられているといえる。とりわけ、外向性は心理学的安寧感5側面すべてに促進的影響を見せた。さらに、「神経症傾向→自己受容」、「外向性→人生における目的」、「外向性→積極的な他者関係」、「開放性→人格的成長」で比較的顕著な影響経路が得られた。

ところで、阿久津・大矢・若松 (2019) は、男女大学生の主観的幸福感（伊藤ら, 2003により測定）が Big Five 特性のうち外向性と誠実性のみと有意な相関値を示すことを見出した。また、古屋 (2017) は、Big Five 特性うち誠実性、神経症傾向、および開放性のみを取りあげ、大学生の学業遅延傾向におよぼす影響について共分散構造分析を用いて検討した。3つの基本的特性それぞれと学業遅延傾向との間に有意な影響経路が認められた。つまり、生活あるいは学業生活の背景に、基本的性格特性の影響があることを示している。しかしながら、本研究の結果によると、影響の強弱はあるものの、心理学的安寧感5側面が様々な仕方で Big Five と結びついていた。ただし、本研究では基本的性格特性と心理学的安寧感という2概念の測定に依存しており、今後は他の関連概念を含めながら研究を進めていく必要がある。

例えば、先述した Schmutte & Ryff (1997) では日常の感情（肯定的、否定的）を統制変数として導入している。また、橋本 (2015) は、「物事がうまく進み、悪いことよりも良いことが生じるだろう」という信念を一般的にもつ傾

向」である楽観性がポジティブ志向を媒介として幸福感を促進することを男女大学生を対象として明らかにした。ポジティブ志向とは、必ずしも現実に基づかずに現実のポジティブな側面を強調・歪曲する認知傾向を指す。

本研究の主目的はほぼ達成されたが、種々の問題も認められた。今後も引き続き、基本的性格特性と心理学的安寧感との関連についてより精緻に検討すべきであろう。

ところで、諸井 (2001) は、「現在の生活に対する満足度」に関する全国調査 (1958-1997年; 総理府広報室編, 1998) を見ると、ほぼ6割の者が現在の生活に満足していることを指摘した。これは、経済的豊かさと心理学的幸福感の関係が必ずしも比例的関係にあるわけではないことを示しており、順応水準の考えによって説明できる。このような幸福のパラドックスといえる関係は、心理学的概念としての幸福感を様々な経済的指標と関連づけるアプローチを生み出した (大竹・白石・筒井, 2010)。本研究では、基本的性格特性と心理学的幸福感という心理学的概念同士の対応を検討したが、これに経済的豊かさがどのように関わるのかも含めたモデルの構築も今後の課題となるだろう。

〈付記〉

(1) 本報告は、第2著者の馬場菜々花が第1著者の下で取り組んだ卒業研究 (人間生活学科2021年度) に基づいている。収集したデータを第1著者が再分析した。

(2) データの統計的解析にあたって、*IBM SPSS Statistics version 28.0.1.1 for Windows* と *IBM SPSS Amos version 28.0.0 for Windows* を用いた。

V. 引用文献

- 阿久津洋巳・大矢 薫・若松直樹 2019 医療系大学生において大学適応感と自己効力感が主観的幸福感に及ぼす影響 新潟リハビリテーション大学紀要, **8(1)**, 19-30.
- Costa, P.T., & McCrae, R.R. 1980 Influence of extraversion and neuroticism on subjective well-being: Happy and unhappy people. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 668-678.
- Diener, E. 1984 Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542-575.
- Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., & Griffin, S. 1985 The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.
- Eysenck, H.J., & Eysenck, S.B.J. 1975 *Manual of Eysenck Personality Questionnaire (Junior and Adult)*. Hodder & Stanton.
- 古屋 健 2017 大学生の学業遅延傾向に関わる性格特性について 立正大学心理学研究所紀要, **15**, 33-45.
- 浜崎隆司・田村隆宏・木内陽一・梶井一暁・長島真人・山田啓明・寺菌さおり 2010 大学における課外活動が心理的 well-being に及ぼす影響—鳴門教育大学フィルハーモニー管弦楽団の活動を中心として— 鳴門教育大学研究紀要, **25**, 180-188.
- 橋本京子 2015 『ポジティブ志向と幸福感の心理学』ナカニシヤ出版
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 **74(3)**, 276-281.
- 唐澤真弓・菅 知絵美 2010 幸せと文化—ポジティブ心理学への文化的アプローチ— 堀毛一也 (編) 『ポジティブ心理学の展開—「強み」とは何か、それをどう伸ばせるのか—〈現代のエスプリ 512〉』至文堂 141-151頁
- 北山 忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, **10(3)**, 153-167.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. Harper & Brothers. 猪股佐登留 (訳) 『社会科学における場の理論』誠信書房
- 三原健吾・岡村尚昌・矢島潤平・津田 彰 2019 大学生における精神神経内分泌免疫学的反応と主観的健康感に対する eudaimonic well-being と hedonic well-being の分化的関連性 行動医学研究, **24(2)**, 84-96.
- 諸井克英 2001 幸せになるために 土肥伊都子・諸井克英 共著 『福祉の社会心理学—みんなで幸せになる方法—』ナカニシヤ出版 7-45頁
- 諸井克英・丸山佳美 2011 女子大学生における幸福感と時間的比較 学術研究年報 (同志社女子大学), **62**, 157-165.
- 諸井克英・早川沙耶・板垣美穂 2014 女子大学生における超常現象観の基本的構造 生活科学 (同志社女子大学), **48**, 13-24.
- 諸井克英・板垣美穂 2018 コミック読書経験の基底にある性格特性 生活科学 (同志社女子大学), **52**, 12-20.
- 諸井克英・木ノ下晴菜 2020 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (IV) —日常の心理学的安寧感と SNS (social networking service) 世界における居場所感覚— 生活科学 (同志社女子大学), **54**, 1-10.
- 諸井克英・坂元宏江 2014 女子大学生における職業価値観

- 性格特性との関連— 生活科学 (同志社女子大学), **48**, 25-32.
- 諸井克英・坂下ひかり 2019 友だちの性格特性認知におよぼす交際期間の影響 (2) —対人魅力におよぼす効果の分析を中心として— 学術研究年報 (同志社女子大学), **70**, 73-83.
- 諸井克英・岡田紗季 2021 基本的性格特性が方向感覚不全におよぼす影響 学術研究年報 (同志社女子大学), **72**, 77-84.
- 西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, **48**, 433-443.
- 大石繁宏・小宮あすか 2012 幸せの文化比較は可能か 心理学評論, **55**, 6-21.
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎 (編) 2010 『日本の幸福度—格差・労働・家族—』日本評論社
- Robinson, M.D., & Ryff, C.D. 1999 The role of self-deception in perceptions of past, present, and future happiness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 595-606.
- Ryff, C.D. 1989 Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- Ryff, C.D., & Keys, C.L. 1995 The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 719-727.
- 坂本弘子・福森利智子・木村紀美 2018 看護大学生における臨地実習が心理的 well-being に及ぼす影響 八戸学院大学紀要, **57**, 173-183.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽 2004 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌 **51**(10), 845-853.
- 新村 出 (編) 2018 『広辞苑第七版』岩波書店
- 総理府広報室 (編) 1998 『月刊世論調査平成10年3月号 国民生活』大蔵省印刷局
- 竹林 滋 (編) 2002 『新英和大辞典第6版』研究社
- 植田 智・吉森 護・有倉巳幸 1992 ハッピーネスに関する心理学的研究 (2) —ハッピーネス尺度作成の試み— 広島大学教育学部紀要 (心理学), **41**, 35-40.
- Schutte, P.S., & Ryff, C.D. 1997 Personaligy and well-being: Reexamining methods and meanings. *Journal of Personaligy and Social Psychology*, **73**(3), 549-559.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的—相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**(1), 61-67.

付表1 Big Five と心理学的安寧感との関係—ピアソン相関値—

	I. 自己受容	II. 自律性	III. 人生における目的	IV. 積極的な他者関係	V. 人格的成長
I. 神経症傾向	-.52 <i>p</i> =.001	-.25 <i>p</i> =.001	-.15 <i>p</i> =.027	-.23 <i>p</i> =.001	-.17 <i>p</i> =.010
II. 外向性	.43 <i>p</i> =.001	.31 <i>p</i> =.001	.38 <i>p</i> =.001	.50 <i>p</i> =.001	.43 <i>p</i> =.001
III. 調和性	.29 <i>p</i> =.001	.07	.14 <i>p</i> =.042	.23 <i>p</i> =.001	.14 <i>p</i> =.036
IV. 開放性	.32 <i>p</i> =.001	.22 <i>p</i> =.001	.32 <i>p</i> =.001	.18 <i>p</i> =.006	.48 <i>p</i> =.001
V. 誠実性	.01	.26 <i>p</i> =.001	.31 <i>p</i> =.001	.09	.10

N=228

付表2 心理学的安寧感尺度における残余項目

-
- well_a_1 私は、これからも色々な面で成長し続けたい。
- well_a_5 私は、うまく周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる。
- well_a_6 私は、温かく信頼できる友人関係を築いている。
-
- well_b_2 私は、状況をよりよくするために、まわりに柔軟に対応することができる。
- well_b_4 私には、これ以上の新しい経験や知識は必要ない。
- well_b_8 私は、自分の身に降りかかってきた悪いことを、自分自身の力でうまく切り抜けることができる。
-
- well_d_2 私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分自身で作上げたものである。
- well_d_8 私は、まわりの状況にうまく折り合いをつけながら、自分らしく生きている。
-
- well_e_1 私の能力は、もう限界だ。
- well_e_2 私にとって、人生は退屈で興味が湧かない。
- well_e_3 私は、自分の行動を決定するときには、社会的に認められるかどうかをまず考える。
- well_e_5 私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程といえる。
- well_e_7 私は、習慣に囚われず、自分自身の考えに基づいて行動している。
-

